水戸地方裁判所　民事第２部　御中
令和元年 10月 7 日

陳述人　原告 相沢清子

陳　述　書

１、３．１１その日の体験と原子力事故の怖さ

私は、東海村に住んでいる相沢清子です。東海第二原発からは３．９㎞の所に住んでいます。大きな地震が起こるたびに、原発は大丈夫だろうかと心配になります。それというのも２０１１年３月１１日の、あの東日本大震災を思い出すからです。

私はその日、東京の二女の家にいました。二女は２月２５日に出産し、退院してきましたので、手伝いに行っていたのです。大きな地震は東京にも及び、窓外の電線が大きく揺れていました。私は娘と生まれたばかりの赤ちゃんと三人でテーブルの下にもぐり、震えていました。生後２週間しかたっていない赤ちゃんも目を丸くして、泣き声も立てず、緊張した様子でした。戸棚の食器は崩れるし、壁に掛けてあった額なども落ちてきました。実に恐怖の時間でした。常磐線も止まってしまって動きがとれず、１週間ぐらいで帰る予定でしたが、それから３週間も留まることになりました。一時、計画停電で地域別に停電になったりしましたが、その後は電気がつくようになり、テレビに釘付けになって福島原発の様子を見続けていました。

原子炉を冷やすために、上空からヘリコプターで水をまく映像が見えました。水は霧のようになって原子炉に届く前に消えてしまいました。次いで、消防隊の決死隊員がポンプ車のホースを事故現場の取り付け口に差し込む映像が流れました。放射線量の高い現場での作業員の試行錯誤の作業を画面に釘付けになって見ながら、原発事故のすさまじさを感じていました。

また、政府の事故報道は、「直ちに影響はありません」を繰り返すだけで、事故の真相は伝わってきません。「直ちに」影響はないということは、後で健康被害が出るかもしれないということで、報道の真意を測りかね、かえって不安が増長しました。また、一部の専門家と称する人が、「たいしたことはない」、「花粉症のようなものだ」と解説しているのには驚きました。それでは事故現場の右往左往や、住民の慌ただしい避難の事実の説明がつきません。そのような無責任な専門家に腹が立ちました。

後の新聞報道によって、「全員退避」の命令で津波被害者の救助に当っていた消防隊員が、まだ助けられる命を見捨てて、退避してしまったことに嘆き、悲しんでいる事実を知りました。このことは、事故の収束や被災者救援のためにすぐ作業に取りかかれないという原子力事故の特殊な恐ろしさを物語っていると思いました。ただじっと様子を見

守り、放射能の収まるのを待つのみで、手の施しようがないことです。普通の火災であれば、直ちに消防団の人たちが現場へ駆けつけ、一生懸命消火に当たれます。原発事故はそれができません。人々も消防団も、現場からただ遠くへ逃げることしかできないということです。現場の放射能汚染がひどければもう戻ってはこれないのです。

２、これに先立つ１９９９年9月３０日には日本の原子力施設では初めてのJCO臨界事故が起き、３人の労働者が大量の放射線を浴び、うち２人が壮絶な被曝死を遂げました。さらに地域住民など６００名を超す人々が被曝し、１０㎞圏内３１万人が屋内退避を強いられるという原子力災害となりました。

私はその日、用事で日立市に出かけていました。昼食をとるため食堂に入った１２時過ぎ、テレビがJCO臨界事故を報道していました。ヘリコプターが大きな音を立てて上空を飛び回っていました。家には義母が一人で留守番していましたので急いで帰宅しました。情報が乏しくなにが起こったのか正確なことは判らず、二人で家の中にじっとしていました。五感ではなにも感ずることのできない放射能の不気味な怖さに一昼夜耐えていたことも思い出されました。

そして臨界事故事故後に、私の知り合いで大泉昭一さん恵子さんが辿った苦難の道が思い出されます。JCO 臨界事故の転換試験棟から１２０メートルしか離れていない場所で自動車の部品工場を経営していましたが、ご夫妻と従業員とで仕事をしていた最中に事故は起こりました。恵子さんは外で作業をしていて、消防署の人に「窓を閉めて建物の中に入ってください」と言われてびっくりした、事故を知らせる防災無線が各家庭に設置されていましたが、大泉工業所には設置されていませんでしたので、事故のことは全く知らずに仕事をしていたからです。

昭一さんは紅皮症という皮膚病を患っていましたが、事故の影響で病状は悪化しました。妻の恵子さんは胃潰瘍になり、JCO という言葉を聞くだけで、いてもたってもいられなくなり、布団をかぶって震えている状態になり、住まいは日立市久慈町でしたが東海村にある工場には近づけなくなり、仕事ができなくなってしまいました。医者に診てもらったところ、PTSD と診断されたそうです。重要な経理を担当していた恵子さんがいなくては工場は成り立たず、昭一さんの症状もさらに悪化し入院する事態になり、やむなく工場は閉鎖されてしまいました。この間お二人は、不自由な体を押してJCO等を相手取り裁判に訴えましたが、不当な判決を受けました。その後体の全体的な異変に悩み続けていた昭一さんは２０１１年2月７日に、恵子さんは２０１８年1月１５日にお亡くなりになりました。事故にさえ遭わなければ、仕事はまだまだ続けられたでしょうし、もっと豊かに人生を閉じることができたでしょう。

またＯさんは、事故現場から西に６００㍍ほど離れた自宅で、大工さんに家のリフォームをしてもらっていました。事故の日は朝から外に長時間いましたが、事故のことを知らずにいたことを悔やんでいました。東海村に接している地域なのに那珂町（現・那珂市）

には何の通報もありませんでした。それ以来、喉はヒリヒリし吐き気もし、皮膚に赤いポツポツができて、長いこと悩み続けました。郵便局員でその日JCOの現場周辺で郵便物の配達業務に携わっていた人も、下痢に悩まされ、仕事を続けるのが困難になるほどに健康状態が悪化してしまいました。この外にも、事故後に健康状態の異変を訴える人は多数いました。そのことを、今新たに思い出しております。

3、親戚の人達の避難体験を友人から聞いて

福島県楢葉町で生まれ育ち、結婚して東海村に居を構えた友人のＩさんから、私は、事故前のふるさとを自慢げに聞かされていました。彼女の話によると福島第一原発事故で、楢葉町の人達は全住民避難となり、生活は一変してしまいました。「原子力が危険なので南の方角へ逃げてください」と、突然の有線放送が流れ、原発で何が起こっているのか理由もわからず南へ南へと逃げたそうです。Ｉさん宅にも一時的にダンナさんとＩさんの親戚の人達が１５人避難してきました。その後彼らは不安を抱きながら平均７回も転居を繰り返しました。８月に仮設住宅が完成したのでそこへ入居しました。震災前は元気だったダンナさんのお母さんは移動の末に亡くなりました。外にも親戚や知人が亡くなりましたが、自宅での葬儀はできず、不慣れな土地での別れになりました。２０１５年９月５日に町は全帰還となり、新たな問題が発生し心が痛みました。それは老いたＩさんの実母はもとの家に帰りたいと言って新しいところには行かないと言うし、弟さん夫婦は戻らないと決めて、避難先に土地を求めました。

人の住まない家や庭、畑は荒れ放題です。昔からの風習や文化、住民同士のつきあいは壊れ、何もかも奪われてしまいました。盆や正月には親戚が大勢集まり、和やかに過ごしたふるさとです。春には土手の桜並木がピンクに染まり、夏には八幡様のお祭りがあり、秋には川に鮭が戻り、紅葉が木戸川渓谷を彩り、冬にはたくさんの白鳥が飛んでくる美しいふるさとはどうなってしまうのかと。

原発事故がもたらした苦難の逃避行の末の数々の死や、帰還を巡る家族の葛藤、そしてふるさとの崩壊と、現実に起こった出来事を聞くに付け、「何と理不尽な」、との思いが私の心をいっぱいにします。そして同時に、東海第二原発のことを考えざるを得ませんでした。原子炉施設の老朽化に自然災害が加わるか、運転操作失敗などの人為的なミスか、何らかの予測できない原因で大きな事故が東海第二原発で起こったら、Ｉさんの親戚の人達が辿ったと同じような運命を強いられることになります。福島第一原発事故の教訓を生かして多少の対策はとれるとしても生活上の激変の基本は変わらないと思わざるを得ません。

4、浪江町から避難してきたＫさんのこと

また、東海村の私の近所のアパートに住むようになったＫさんと知り合いになりました。Ｋさんは浪江町からあちこち転々と移動し、８回目に東海村にたどり着きました。い

まは８９歳のおばあさんです。彼女は福島事故前に夫を病気で亡くしているので一人暮らしでした。近くに住んでいた３人の子持ちの娘さんを頼りに、一緒に逃げてきました。やっとたどり着いた所が原子力施設のある東海村だったのですが、「もうどうでもいいや」という気持ちになってしまって、それから８年半もたってしまいました。何度か私の家に遊びに来て、おしゃべりをして少しだけ元気になって帰って行きました。始めの頃は、比較的近くですので散歩がてら来たんだよと言って自分から一人で歩いてきていました。よくお話していきましたが、私は聞くことしかできませんでした。浪江での生活、近所づきあい、楽しかった出来事を思い出しながら話してくれました。

それが原発事故以来、近所の人達とはバラバラになり、楽しいこともなく、孤独な先の見えない生活にだんだんイライラがつのり、病気がちになり、出歩くことも少なくなっていったようです。体力も衰えてきたようです。この頃はお誘いしても出るのがおっくうになってしまったのか、「せっかくですけど」と言って断わられることも多くなりました。避難した人は誰でもそうだったと思うのですが、最初の頃はいつか浪江の我が家に帰れるんじゃないかと強い希望を持っていました。人の住まなくなった家は荒れるに任せ、しかも動物が入り込みめちゃめちゃになってしまっているという現実を見て、次第に帰れるという希望を失ってしまっているように私には見えます。この頃は目も見えにくくなり、本を読む気力もなくなってしまったと嘆いていました。

去年２０１８年には頼りにしていた二本松市に避難していた弟さんも病死し、さらに親戚や知人も何人も亡くなってしまって、一層元気をなくしているように見えます。事故前は、広い屋敷で野菜作りに励んだり、友だちも尋ねてきて楽しく元気で暮らしていました。「人間身体を動かさないとダメになってしまうね」としみじみ言っています。

Ｋさんの原発事故後の様子の変化を思うと、「原発事故さえなかったなら」との思いを深めます。人生の後半部分をふるさとで、近しい人に囲まれて、遙かに豊かに過ごすことができたはずなのです。そのような人生が原発事故によって、突如絶たれてしまったわけで、Ｋさんの嘆きと悔しさを私はいたいほど判るつもりです。そして原発を推進する勢力に言い知れぬ怒りを感じながら、やはり「明日は我が身」との思いを禁じ得ません。

５、私の願いー東海第二原発を再稼働しないでほしいー

私は現在７８歳で、７７歳の夫と二人で暮らし、二人で一人前という感じで生活しています。娘３人はそれぞれ結婚し、県外で子どもを産み育てています。みんなそれぞれ働いていますので、会うのは正月休みと夏休みの二回だけです。陰ながら元気で育ってほしいと願っていますが、今のところ皆元気です。先日は京都の孫達が、それぞれ遊びに来ておしゃべりをして帰りました。

こんな普通の生活が、原子力事故によってどうなってしまうのか、と思うと不安でいっぱいです。東海第二原発が大きな事故を起こしたら、近くに住む私たち家族の生活が

一変してしまうことは、福島第一原発事故によって生活を一変させられた人々の現実を見、知って、容易に想像ができます。

遠くへ逃げるにしても、自家用車で逃げる自信はありません。バスで逃げるといっても、バスをそれだけ確保できるかどうか、運転手だって被曝しながらわざわざ東海村まで来てくれるか心配です。バスが来たとしても集合場所まで歩いて行くには時間がかかります。大勢の人が集まってきて集合場所は混乱します。東海村の計画によると私たちの地区は取手市が避難先に指定されています。訓練にも参加してみましたが、２００人か３００人程度の参加者でも、バスに乗り込むまで時間がかかり、役場職員の準備は大変なものだと思います。受け入れ側の体制も大変なものです。道路だって地震で壊れて陥没し、スムーズに走れるかどうか、橋が壊れてしまったら先へは進めません。何から何まで計画通りに行くはずはないでしょう。体育館に集まって２～３時間過ごしただけで疲れてしまい、うんざりします。寒い日だったら寒さが身にしみます、暑い日だったら暑さに苦しみます。そんな環境の中に何日も居続けたら病気になってしまうでしょう。
事故によって家を追われ、仕事をなくし、地域を喪失し、健康も命までもが奪われます。避難生活が続けば、病気がちになるでしょう。高齢者になった私は自由に行動できなくなって、引きこもっていくだけです。避難先には、今までのようには子も孫も来れなくなり、交流も間遠になり、途絶えていくでしょう。福島では子どもたちの甲状腺がんの問題が深刻ですし、壊れた原発からの汚染水も大問題になっています。形は違っても同じような問題が茨城でも起こります。そもそも放射能で汚染されたふるさとに帰還するのは困難を極めるでしょうし、事故以前の生活は二度とかえってきません。

東海第二原発は４０年も運転した原発なのに、もう２０年延長しても良いという信じられない許可を原子力規制委員会は出しました。常識的に考えても、４０年も運転した老朽原発はもう廃炉にすべきだと思います。強引に２０年延長して６０年動かしたとしても、その後は必ず廃炉にしなければならないのですから、先延ばしにして、２０年もハラハラドキドキしながら運転して行くということは実に愚かなことだと思います。

東海第二原発の周辺にはたくさんの人が住んでいます。３０㎞圏内に９４万人が住んでいるんです。首都圏に一番近い原発ですから、事故が起これば被曝しないで避難できるはずもないし、避難先を見つけることも困難です。３０㎞圏内の自治体に求められている実効性ある避難計画などできるはずもないでしょう。原発を再稼働しないで安心して暮らしていきたいと多くの人々が望んでいます。

また増え続ける放射性廃棄物の問題も極めて深刻です。次の世代に後処理を任せることになってしまいます。私たちの願いは子や孫達が安心して、平和に暮らしていける世界を残してあげたいです。

以上